俺と天使と…

ヤシロ　ユウイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と天使と…

【Ｎコード】
Ｎ６０４５Ｔ

【作者名】
ヤシロ　ユウイ

【あらすじ】
ある日、俺は『死亡フラグ』を立てられて人生が終わるはずだったが、天使によって助けられ、死亡フラグを回避するために、その日をやり直すことになった。そして、俺と天使の協力が始まった。

一回目

この日俺は、死亡フラグを立ててしまったらしい。親切な天使がそう言ったのだから、間違いない。
そして実際に今日、何度死んだか……。本当に数え切れない。
「ところで、本当に俺が死なない終わり方なんてあるのか？」
「ある。確実に。しかしそれは一つだけなのだが」
と、勝手に人の家に上がりこみ、人のゲームをやっている天使がえらそうに言った。
「つーか、その方法を俺に教えてくれればいいんじゃないか？知ってるんだろう、どうせ」
「知っているが、言いたくはない」
「なぜなのでしょうか？」
「それは、……今から考える！！」
胸を張ってそういった。この天使は、本当にそういうやつなんですよ。残念ながら。
そういえば、まだ俺と天使の出会いの部分を言ってなかったな。出会いつまり……最初の死ってことなのですけど。

いつもどおりの朝。俺は身なりを整えて、学校に行く――ちなみに家から歩いて、１０分の場所にある。それが志望理由の一番でかい部分でもあった。登校途中にも変わったことは何もない。学校について授業を受けているときもいつもとなんら変わりはない。重要なのは、放課後だ。
そう、放課後にいつもと違ったことが起きた。と、いっても悪いことなどではないのだけど。幼馴染と久しぶりに会った。久しぶりに会ったので、一緒に遊びまわった。気づいたら、もう十時前だった。だから「そろそろ帰るか」そう言った。その後少しよくわから

ない沈黙が流れた。けど、ふつうにまた逢おう、といって分かれたんだけど、その帰りになぜか刺されて死んだ。……らしい。
　つぎに目を開けたときに、あいつが、天使が居た。
「あなたは死んだ」
「はい？」
「もう一度言う。あなたは死んだ」
「そうなんですか。じゃあここは天国かどこかですかねー」
「ちがう」
「じゃあ、まさか地獄のほうですか！」
「ちがう」
「じゃあ、ここはどこなんでしょうか？」
「そのうち教えるから少し黙って私の話を聞け」
「えっ。は、はい。……でも出来ればどこなのか知りたいなー。なんて言ったりして」
「ここは死との境目。以上説明終わり」
「短っ。と言うか説明にぜんぜんなってないでしょう」
「おまえは、死亡フラグを立てた。だから死んだ」
「死亡フラグ？　それって、ゲームであるヤツのこと？」
　つーか、サラリと言ったが、あなたからお前に呼び方変更になってますよ！　あえてスルーした、俺は少し大人だからね。
「似たようなものと考えられる」
「じゃあ本当に俺は死んだのか？」
「死んだ」
「それでこの後、天国に行くとそうゆう感じでしょうか？」
「あなたにはチャンスがある」
「チャンスって何の？」
「あなたが生き返るチャンス」
「生き返れるのか？　本当に？」
「生き返れる。ただし条件付きで」
「条件？」

彼女は、そういって、うなずいた後歩き出した。
「私は天使」
「天使？でも羽とかないけど？」
「実際には、人間と見た目は変わらない」
「ふーん。そうなのか」
「そう」
「俺は……」
そういって、自分の名前を告げようとしたとき少し視線が下のほうに言った。
「うわっ。こっこれって」
「あなたがいた町」
俺の下には、少し前まで俺がいた場所だった。学校も、俺の家も見える。ついでに殺された場所も。
「おかしい部分がいくつかある」
突然彼女は、今までとは少し違う表情をしてそういった。――なんというか、すこし、いやかなり悔しそうな顔をしていた。実際にそんな顔はその時の一回だけだった。
「おかしい部分って。なんだよ」
「この日の死亡フラグは、同じその日に立てられたものであるということだ」
「その日に立てられたってどういう意味だ？」
「つまり、おまえがあの日誰かに恨みを買うようなことして、そいつがおまえを殺したということだ」
「いや、でも知らない奴だったぞ。たぶんだけど」
「知らない奴か。だったら、そっちの奴のほうも調べる必要がありそうだな。まあ、どちらにしろ次は大丈夫だろうがな」
「次ってどういうことだよ」
「さっきも言ったとおりに、生き返ることが出来るんだよ。あの日に」
「いや。お前が言ったのは、生き返るチャンスがあるってことだけ

だぞ。何だつまりやり直せるのかあの日を？」
「そういうことだ」
「何だ。てっきり生き返りを賭けた戦いでもあるのかと思ったぜ」
「それは実際にあるが、これには調査すべき点があるためこのようになった」
「そうなのか。じゃあその調査ってのが終わったら？」
「安心しろ。おまえはそのまま生きていられる」
俺のほうを見てそういった後、生き返すための準備があると言って、どこかに行った。
その後は、いろいろすごかった。生き返るのにあんな物が必要だなんて。というわけで割愛。

目を開けたら、今までどうりの自分の部屋のベッドで寝ていた。
さっきまでことがまるで夢だったかのようなそんな錯覚さえ覚えてしまうほどに、慣れ親しんだ朝の風景だった。
「とりあえずあの日に戻ってきたのか」
そうやって独り言を言ったつもりだったが、
「とりあえず腹がすいたな。朝飯はまだか？」
なぜか天使もいた。
「何でお前も来ているんだ？しかも、俺の部屋に」
「同じ場所に降りる必要があっただけだ」
天使というより悪魔、そう小悪魔といってもいいくらいのほほえみを向けてきた。……正直、怖い。
「とりあえずいつもどうりにやっていてくれ。私は少し遊びに――いや、大事な調査があるからな！！」
ぐっと、握りこぶしを作ってそういった。つーか、ここはつっこませてもらうよ。今、遊びにって完全に言ってたから。聞こえてましたから。大体調査なら俺も行ったほうがいいんじゃないのか？と、言おうとしたときに、
「それじゃあ、言ってくる」

と、天使は二階にある俺の部屋の窓を開けて言った。
「おい、ここは二階だぞ。その窓からどうするつもりだ？」
当たり前のような疑問を言った。しかし、少し忘れていたがこいつは天使だったのだ。だから当然のように
「もちろん飛んでいく」
そう言った。そして、天使の羽は、どんな形なのか、マンガやアニメで見るような真っ白なものなのか、など考えているうちに飛びだしていった。そのままの姿で。
「羽とかいろいろ考えてしまった俺が馬鹿だったよ」
と、いまさら後悔しても遅いので、とりあえずこの日を無事生きて終わらせることを考えよう。そして自分に言い聞かせるように、
「とりあえず死亡フラグってのを立てられないように、過ごせばいいわけだろ？まあ、なんとかなるだろう。いざとなったらどうせ、あいつも助けてくれるだろうしな」
そうして一回目の朝を迎えた。

一回目（後書き）

はじめまして。ヤシロ　ユウイです。始め書いた作品ですが、よろしくお願いします。ありがとうございました。

放課後前

学校に着き、辺りを見回すもちろん変わったことなんかない。でも、あの日とまったく同じ気がしたので、とりあえず動かないことにした。

そして、何事もなく昼。

「ここまでは、前と変わらない」

なぜか携帯電話という現代の必需品を天使は当たり前のように持っていた。しかも、番号を知られている。

「じゃあ、死亡フラグはいつごろ立てられたんだ？」

「放課後」

ここまでの俺の用心は無駄に終わった。

「放課後ってことは、もしかしてあいつなのか？」

「たぶん、あの幼馴染が関係している」

「あいつが死亡フラグを立てたんじゃないのか？」

「あの人間はどちらかと言うと、好意を抱いていた」

好意ねぇ……なんかはずかしいぞ。その言葉。

「じゃあ、もしかしてあいつを好きな奴にいろいろ勘違いとかされて、殺されたとか？」

「まあ、ありえなくはない」

「あいつに会わなかったらいいんじゃないのか？」

「おそらく不可能」

ずいぶんと言い切ってくれたものだな。

「これもフラグのようなもの。いや、出会う運命にあった。今日、出会う」

「そうなのか」

そこまではっきりと言われたそういうしかない。しかし、大事なのは、

「俺はどうすればいいんだ？」

「とりあえず幼馴染に会うまでは、お好きなように」
「は？」
それって……つまり？
「ここまでは、なんだったんだ」
「とりあえず、前とは違うような接し方を心がけるように」
あっさりとスルーされる俺の話。
「まあ、わかったよ。あいつとの接し方を変えればいいんだろ？」
「じゃあ、そんな感じで」
そこまで言って電話が切れた……
とりあえず放課後までは適当に過ごしてもいいんだよな？まあ、重要なのはどうやら俺の幼馴染、久しぶりに会う幼馴染であるあいつに対する接し方が問題らしい。その接し方ってやつを考えてますか。とりあえず、放課後まではそうしていよう。
そして、放課後が来た。なんだか前より早く終わったような、そんな感じもした。まあ、気のせいなんだろうけど。

放課後……前とまったく同じ場所で俺はあいつに会った。この後のことを少し思い出してしまい、身がすくみそうになったが、すぐに思い直して、
「今回は必ず生きてやる」そう小さくつぶやいた。

俺と幼馴染

学校に着き、辺りを見回すもちろん変わったことなんかない。でも、あの日とまったく同じ気がしたので、とりあえず動かないことにした。

そして、何事もなく昼。

「ここまでは、前と変わらない」

なぜか携帯電話という現代の必需品を天使は当たり前のように持っていた。しかも、番号を知られている。

「じゃあ、死亡フラグはいつごろ立てられたんだ？」

「放課後」

ここまでの俺の用心は無駄に終わった。

「放課後ってことは、もしかしてあいつなのか？」

「たぶん、あの幼馴染が関係している」

「あいつが死亡フラグを立てたんじゃないのか？」

「あの人間はどちらかと言うと、好意を抱いていた」

好意ねぇ……なんかはずかしいぞ。その言葉。

「じゃあ、もしかしてあいつを好きな奴にいろいろ勘違いとかされて、殺されたとか？」

「まあ、ありえなくはない」

「あいつに会わなかったらいいんじゃないのか？」

「おそらく不可能」

ずいぶんと言い切ってくれたものだな。

「これもフラグのようなもの。いや、出会う運命にあった。今日、出会う」

「じゃあ、前とは何かちがう対応をしなきゃな。どうすればいいんだ？」

「それは、自分で考えなさい」

いきなり、きつく離されてしまった。手伝ってくれるんじゃなか

ったのか。どっちにしろ、死亡フラグを立てられないようにするしかないか。
……それをどうすればいいんだと、そういう問題だと思うんだけど。とにかくあたって砕けるぐらいで行くか。本当に砕けたらまずいけれども。

「おーい」
そうだ、この場所であいつに再会したんだ。俺の幼馴染で、俺の死亡フラグに関係している幼馴染に。
「ひさしぶりじゃないかい」
相変わらずの、良くわからない口調での再開だった。俺にしてみれば二回目の。
「おう。ひさしぶりだな。芽衣（めい）」
これが俺の幼馴染の九条芽衣。背は低く、まるで小動物のような人懐っこさの変な口調の女の子。
「お前も帰りか？」
「まあね。部活もやってないしね」
そう言った後すぐに、
「やりなおしで」
「は？」
「さっきのやつ」
「さっきのって。部活か？」
「そう。さあ、何部か聞いて」
「わかったよ。」
こうなると面倒だから簡単に応じる。まあ、どうせくだらないことでも思いついたんだろう。
「何部なんだ？」
「もちろん、帰宅部だよ。しかもエース」
「へぇ。すごいですねー」
「褒め称えるがいいよ」

面倒くさいので、適当に褒めておいた。しかも、えらく満足そうな、顔をして先に歩いていった。
「まったく。このあとどうするかな」
前は、芽衣のペースのままだったから今回は、俺が主導権を握るやり方で言ってみるか。まあ、とりあえずやってみるか。
「さっきからなーにぶつぶつ言っちゃってるのさ」
「どうしようかと思ってね」
「なんのこと？」
「これからのこと」
「こっこれからって。まだ、そんなのはやいよ。私たち久しぶりに会っただけじゃない」
「いったい何の話をしているんだ！？」
「これからの私たちの将来の話！！」
いや、そんな力強く言われても。
「うん。でも、私嫌じゃないよ」
目をすごいウルウルさせて、上目遣いって。
「皆川芽衣。いい感じじゃない」
なんかすごい怖い。まあ、もちろん皆川って言うのは、俺のことなんだけど。
「とりあえず。この後どこに行きますかって話なんだけど」
「うん。じゃあ、とりあえず適当なところで語り合おうか！！」
なんか、前と同じような気がしてきた。

俺と幼馴染2

すごかった。とにかくすごかった、それしか言えない位の一人しゃべりだった。しかも、途中から自分の人生とか、語りだしてしまった。熱く一人で語って満足の様子の芽衣は、次はどこに行こうかと歩き回っている。もう、暗くなった街で。

「なんで、二時間も話し続けられるんだ？」

「簡単に私の人生というものを、語ることなんて出来やしないんだよ」

そう胸を張っていった。言っておくけれども、張ってもたいした大きさではない。

「じゃあ、次はキミのターンだぜぃ」

「はあ？俺にも自分の人生を語れと？」

「もちのろんだぜぃ」

なんだ。それは。とりあえず俺からは、

「俺とお前は幼馴染だから、人生全部語る必要なんてないだろ？半分くらいは一緒に過ごしたんだから」

「そして、これからもいっしょに過ごそうぜと続くんだよね。もちろん！！」

「なんでだよ！！もちろんって、久しぶりだって言ったのはそっちからだぞ」

「今までさびしい思いさせてごめん。でも、これからはずっと一緒だぜ。ってことでしょ。もちろん」

「もちろんじゃねえよ。全然ちがうからな！」

「まったくもう、ツンデレってやつだね」

もう、反論と言うか突っ込むのが面倒くさくなってきた。だから、ちがう反応で返してみる。

「べ、別にそういうわけじゃないんだからね」

ツンデレで返してみた。言っておくけれども本当にツンデレなわ

けじゃないので。
「ななな、なにいってるんだいよ。いきなりよう」
めちゃくちゃ動揺していた。効果覿面だった。なんか顔が赤くなったり、もじもじしたりしているけれど、基本的に芽衣の行動や発言はよくわからないしまったく読めないのでスルー。とりあえず、語ったりするのはこれぐらいにしておこう。
「じゃあ、語りは終わりで。一人語りは終わりで」
かなり重要なことなので、二回言いました。まだ、言い足りないくらいではあるけれども。
「ほう、何か予定でもあったりするのかい？」
「予定なんてそんなの別に何もないけどな」
まあ、やらなくちゃいけないことならあるんだけど。
「とりあえず、歩くか」
「私と一緒に歩く予定だったと？」
「まあ、そうだな」別に間違ったことじゃないのが、すごい。
「せっかく、久しぶりなんだし今日は遊び倒すか」
「いいね。遊びまくっちゃいますか」
やっぱり、こういう事には、ノリがいいな。まあ、それでこそって感じだな。
「それじゃあ、いきなりはどこに行こうかい？」
「ああ、そ、そうだな」
やばい、自分から提案しておきながらまったく考えていなかった。っていうか、こう言うときにこその天使じゃあないのか？何をしているんだ？あの人は、いや、人じゃないのか。
と、後半どうでもいいことを考えていた所為で、また、芽衣が前を進んでいる形になってしまった。
「なにしているのさ」
「いや、別になんでもないけど」
「とっとと、遊び倒しに行こうぜぃ」
「わかったよ。じゃあ、あっちの……」

「却下」
「速っ」
「つまらないことを言わせるんじゃあないよ。ふっ」
「なんなんだ。そのキャラは？」
明らかに失敗だろ。っていうか、なにげにあの却下がショックだった。
「何もないのかね？チミ」
「また、キャラがおかしくなってるぞ」
「あっ。そっか、もしかしてツンデレとか期待してた？」
「違うから！！」
「強く否定するところがまた怪しい」
「じゃあ、どう否定すればいいんだよ」
「簡単なことだよ。めちゃくちゃ期待してた、って目を輝かせながら言えばいいんだよ」
「否定じゃなくなっている！？」
つまり、受け入れるしか選択肢は最初からなかったと言うことなのか？
「まあ、その輝きに免じて許してあげるけどね」
よくわからないけれど。許された。って言うか輝いているのか……。
「話が変わりすぎだろ。どこに行くかって話だろ」
自分でも、忘れそうではあったけど。
「じゃあ、行きたいところがある」
珍しく芽衣が、普通のテンションで、普通の口調で言ってきた。
何か前とは違う展開に期待を抱きつつあった。

俺と幼馴染3

結局その、行きたい場所に行き着くまでにはそれなりの時間になってしまった。なぜかと言うと、芽衣がこんな事を言ったからだ。
「さあ、推理したまえ」
「推理って？どこに行くかをってことか？」
「モチのロンですよ」
さむい。じゃなくって、
「あのまじめモードは、どこに行ったんだ？！」
「最初からまじめちゃんですけど何か？」
まじめなときなんか無いだろ、最初からさっきまで。初めて会ったのはいつだったのか？そんなことも覚えていないくらいに昔のことだ。その俺が断言して言える、芽衣がまじめなときなんて数えるくらいしかない。
「何を考えているんだい？」
芽衣が不意に顔を覗き込んでくる。
「まあ、わかるんだけれどね」
「俺が何を考えているのかを？」
「うん。もちろんだよ」
さっきのやつが失敗だと気づいて普通に言ってきた。
「私で、想像してたんでしょ？」
「想像って何をだよ？」
「えっ。そ、それは、えっちぃことを……」
「してるか！！そんなこと！！」
大声で否定。想像と言うか、考えていたというのはあっていたりする。
「それで、どこに行くんだ？」
「いや、推理してくださいよ」
「ギブアップ」

「速い。速すぎるよ、いくらなんでも」
「じゃあ、どうすればいいんだ」
「だから、答えればいいんだよ」
「だから、ギブアップと答えただろ」
「……」
冷たい視線が突き刺さってくる。
「じゃあ、とりあえず。そのコンビニ」
と、ちょうど目の前に見えたコンビニを指差していった。
「私たちの行く場所がコンビニだと推理したわけですね？」
なんか冷たい。
「いや、ちょうど俺がコンビニに行こうかと思って」
「ふーん。」
「す、すぐに済むから」
後ろで何か言っていたが、無視をして走ってコンビニに入った。
そのタイミングで、電話が来た。……天使から。
「もしもし」
「わかったことがある」
「わかったことってもしかして、何で死亡フラグが立てられたのかってことか？」
「残念。違います」
「じゃあ、さようなら」
「今回のことには、天使が関係している」
「天使ってお前だろ？」
「違う天使」
天使にも名前ぐらいあるよなそれは。この天使の名前はもちろん知らないけれど。
「で、その天使を探せばいいのか？」
「とりあえず、報告しておきたいことがある」
「なんだ？」
急に真剣な雰囲気になって……。

「今回もとりあえず、死んじゃうからよろしくね。てへっ」
めちゃくちゃぶりっ子な声で言ってきた。
「何とかできないんですか」
イラッとしたのを抑えつつ言った。
「無理。今回は」
「とりあえず、そのもう一人いるって言う天使を何とかして探し出せばいいんだな？……次は」
「まあ、絶対関係あるとは言い切れないけれど」
「じゃあ、どうするんだよ」
「知らない」
もう、いいや。何言っても無駄になりそうだし。
とりあえず、今言えることは。どうやら今回も前と同じ結末になりそうだと言うことだ。

もう一人の天使

結局また同じ結末になってしまった。最後に天使が言っていたことが本当なら、もう一人天使がいてその所為で俺に死亡フラグが立てられている。と、言うことになる。
「で。もう一人の天使は？」
「どこに居るのかまでは分からない」
「でも、その天使の所為でこうやって繰り返さなきゃいけないんだろ？」
念のため確認をしてみる。
「そう、その天使を探し出せれば何か分かるかもしれない」
「手がかりくらいはないのか？」
「近くに居れば分かるはず」
「じゃあ、今までの場所には居なかったのか」
「だから、これからはあなたとずっといっしょだからねっ！！」
「久しぶりだなそれ！？」
「制服とか来ちゃったりして……」
「見た目なら何とかなるが、いまさら転校とか無理だろ」
「それなら、昔から居たことにすればいいだけ」
「そんなことができるのかよ」
「少しぐらいの間だけ」
「じゃあ次はその作戦で行くか」
「その前にやりたいことがある」
「なんだ？」
「ちょっと狩りに行ってくる」
手に持っていたゲーム機を見せてそう言ってきた。
「天使は本当にゲームが好きなんですね」
「もちろんだ。２４時間やっていてもたりないくらいに」
こっちの怒りが伝わっていないのだろうか？

「とりあえず、もう一人いるって言う天使を探しに行くぞ」
「こんな朝早くから？」
「学校中を探してダメだったら外に出る」
「まあ、それで行きますか。とりあえず」
やる気のあまり見られない天使を引き連れていつもの道を歩く。
もちろん天使は制服だ。
「もう一人の天使はお前みたいなヤツなのか？」
「わからない」
「じゃあ、何か分かることは？」
「なにも無い」
「適当に歩き回っていれば見つかるようなものなのか？」
「実は心当たりがある」
「それを早く言えよ！！」
「ただそうなると少し面倒だから、可能性の少しある学校に行っておこうと思った」
いろいろ考えてはいるんだな。一応。
「で、どういう設定になってるんだ？俺たちは」
「愛人関係」
「おかしいだろ。いろいろおかしいだろ！！」
「普通に兄弟」
「最初からそう言えよ」
「とりあえず学校にいるかを確かめて……」
「あーー」
「何だいきなり奇声をあげて」
「ここには居ない」
「な。そんな簡単に分かるのか」
「ごめんね。てへっ」
「じゃあ、とりあえず居そうな場所に、っとそういえば心当たりがあるんだろ。そこに行こう」
「わかった。でも、今狩りの途中だから」

家の中だけでなく、外に出ても歩きながらゲームをこの天使はしていた。怒らなかった俺って、大人になったな、と少し思った。
「で、そこはどこなんだ？」
「それは」
「それは？」
何でこんなところでもったいぶるんだ？
「あなたの幼馴染である九条芽衣」
そう言って俺の前を歩き出した。

俺と天使と幼馴染

九条芽衣。おそらく俺が唯一幼馴染と呼べるであろう人である。あいつが死亡フラグにかかわっている、そしてもう一人の天使があいつの場所に居るかもしれなかった。

「本当にあいつのところに天使がいるのか？もう一人の天使が」

「間違いない」

なぜそう断言できるのに今まで言ってこなかった。それは、今までには確信が無かっただけなのかもしれないが、なんとなくそうなんじゃないか位には分かっていたんだろう。じゃあそのときに言えよ、芽衣がそうかもしれないって。

「って、だとしたらどうなるんだ？」

「なにが？」

「芽衣がそのもう一人の天使を使って俺にフラグを立てたってことだよな？」

「そういうことになる」

「俺を殺したかったってことなのか……？」

「わからない。知りたかったら本人に聞いて、ただこの天使はやり方が雑」

「雑っていうと？」

「こんなやり方は普通の天使はやらない」

「まず、普通の天使って言うのがよく分からないけどな」

分からなくてもいい。そう天使は言って、一つの場所を指差した。

「あそこに彼女がいる」

そういって指差した場所は、彼女の家だった。

「それくらいなら俺にもわかるんだけどな」

「じゃあさっそく、ピンポンを！！」

「何で楽しみにしてるんだよ。そんなに好きなのかピンポン」

「いやそれほどでもないですけど」

もういいやめんどくさいから無視して呼び出すか。でもなんて言って呼び出せばいいんだ？
「よし、さっそくピンポンだ」
そう言って、天使は呼び鈴を押した。
「って、バカだろお前は。まだどう言うのか考えている最中だぞ！！」
「あっれ、どうしたの？こんなところで？」
「いや、ちょっと話でもしようかと思ってさ」
「うんいいよ」
いいのかよ。いやいやこれでいいんだよ。とりあえず歩きながらでも考えればいい。
「それじゃあガンバ」
そう言って天使は走り去って行った。最後に狩りがどうとかつぶやいていた気がする。
「じゃあどこ行く？」
「そうだ、確か昔二人で行った遊園地って今もあったよな？」
「うん。久しぶりだねあそこは」
「俺はお前としか行ったこと無いからな、思い出って言ったらお前のことばかりだな」
「そ、そうなんだ」
「？あ、ああ」
なぜかそこから芽衣は無口になってしまった。まあこっちにしてみれば好都合ではあるけど。
「わあ、すごおい」
遊園地に到着すると、さすがにいつも通りの芽衣に戻った。さて、ここからどうするかだが、正直に言って、ノーアイディアだ。まったく思いつかなかった。
「それじゃあさっそく満喫しちゃおうじゃないか」
「そうだな」
とりあえずは、このまま遊んで最後に聞き出す。事にしよう。

「うげっ。きもちわる」
「まだ絶叫系ダメだったんだ」
「あんなのも好きになれるか」
「いや、もう大丈夫になったのかと思ったよ、あんなに乗ってるから」
実際もうすでに5回は乗ってしまった。まったく策を練ることが出来ずにただの体調不良。
「でも、もう暗くなってきちゃったね」
そういえば、あの時も最初のときも、これくらいの時間まで二人でいたな。
「ちょっと聞きたいことがある」
「聞きたいこと？何？」
「天使って知ってるか？」
もうまどろっこしく聞くのはやめだ。言っておくが気持ち悪くて面倒だからじゃないぞ。
「……知ってるよ」
「お前のところにいるのか」
「うん。やっぱり迷惑してたんだよね。ごめんね」
「いや、それならいいんだ。たぶんこれでフラグを折れば……」
「あっ、それは無理」
「なんで？」
「私の願いがかなえられていないから」
「願いって何のことだよ」
「天使にその願いがかなうまでは何度でもやり直させてって言っちゃったから……」
「じゃあ、その願いがかなえばいいんだろ。なんだ？」
「それは……」
「俺に出来ることがあればなんでもやるから」
「俺にじゃなくて、俺にしかなんだけど」

「俺にしか出来ないことなのか？」
「うん」
「じゃ、じゃあそれを俺がやる」
「でもその場限りじゃダメだからね」
「その前に何をすればいいのかだけでも教えてくれないか。じゃないとしようがない」
「それは、……私と……」
やけに溜めるな、妙に緊張してくる。変なあせもでてきてるし。
「付き合ってほしいの」
「……ん？」
「だから、私と付き合ってほしいの」
「付き合うって、もしかしてそういうことか！！」
「ほかに何があるって言うの？」
そう言えば前に天使が芽衣は好意を持ってるって言ってたけど。
まさか、こんなことになるだなんて。
「それで、答えは？」
「か、観覧車に乗ろうか」
「え、うん。いいけど」
とりあえずここで考える。セリフとかいろいろだ。

一言で言うと、そんなことは無理だった。こんな密室の空間で二人っきりって、もう無理だろ。さっきからこの沈黙がきつい。
「キレーだね」
外を見てみると、街を一望できる位置にまで昇ってきていた。
「たしかに、きれいだな」
「うん。すごくきれい」
……話が続かない。どうしよう。本当に。
「さっきのことだけど……」
「えっ、あ、ああ」
「返事は後でもいいよ。別に今日でなくても」

「いや、今日じゃないとまずいだろ」
「なんで？」
「今日もダメだったらまた今日が繰り返されるんだろ」
「あ、そうか。私がそうしたんだ」
「そうだろ。まったく」
あはは、と二人で笑っているともう下に付いたようだった。
「じゃあ出るか」
「うん……」
少し下を向きながら芽衣は観覧車から降りてくる。そして、
「行きたいところがあるんだ、芽衣」
もうすでに、心は決まった。気がする。
「行きたいところってどこ？」
「ここに最初に来たときに芽衣が一番見たがっていたものを見に行こうぜ」
「見に行きたいもの？そんなのあったっけ？」
「忘れてるんだったら、思い出させてやるよ、すぐにな」
そして、俺は芽衣の手を取り走り出した。
「やべっ。もう終わってるな」
「もしかして、パレード？」
「そう、こんなところでもやってるんだって言って絶対に観たいって言ってたのを、さっき思い出したんだよ」
「そういえば、そんなことも言った気がする」
「だからここに来たんだけど、少し遅かったな」
「うん。でも、大丈夫だよこれでも」
「でもこれじゃあな」
「フラグのことは私から天使になんとかしてもらうから」
「いや、そんな必要はない」
「？」
芽衣の目をしっかりと見つめながら言葉にする。
「もしかしたらずっと分かってたのかもしれない」

「な、なにを？」
「ずっと芽衣のことを考えていた理由を」
「ず、ずっと考えていた……」
「久しぶりに会ってなのかもしれないけど、それだけじゃない、俺は前から……」
「うん……」
「お前のことが、芽衣のことが好きだったんだ！！だから俺からもう一度言うよ、好きだ。付き合ってくれ」
「うん。もちろん、よろしくお願いします」
周りから拍手が聞こえる。どうやら、大声で叫んでいたから人が注目していたらしい。もうこうなったら、関係ないけど。
「じゃあ、今日はもう遊びまわってやろうぜ！！」
「うん！！」
「結局こうなるんだったらこんな面倒な今年なくてもよかったのに……」
「こんなところで何をしてるんだい？」
「何って芽衣がちゃんとやっているかを見に来た……」
「やっぱりあんたか」
「って、誰？！」
「いまさらか、まったくあんたが気にしている人間の相手の調査をしていた天使です」
「まさか、私の所為で？」
「そう」
「どうしよう、まだ天使になりたてなのに……」
「やっぱり、通りでいろいろ粗いと思ったら、素人だったか」
「す、すいません。すいません」
「いや、もういいから。それに、あの二人を見ていたらなんかもう、どうでもいいかもって思う」
「そうですね。なんか、少しムカつきます」
「そこまでは思ってないけど」

「えっ！？」
「まあやることはもう無いから、帰ることにしますか」
「どうしよう。私首になるかも……」
「私も一緒に謝ってあげるから、帰るよ」
「うぅ、ありがとうございますぅ」
「あの二人も浮かれすぎだなまったく」

「ねえ、いつから好きだったの？」
「いや、俺はそんなにこのオレンジジュースは好きじゃないけど」
「わ・た・しのこと、いつから好きだったの？って言ったの」
「ぅ、えっと、それは」
「い・つ・か・ら？」
「いつの間にかだよ、そうとしか言えない」
「ふーん。まあいいけど？」
「じゃあ逆に聞くけど、そっちは何時からなんだよ？」
「そんなの決まってるじゃん」
「？何時からだ？」
「そんなの最初から、初めて見たときからだよ」
そうして、見事に俺の死亡フラグは消え去り次の日を迎えることができた。もちろん、芽衣と一緒に。でも、天使はどこにもいなかった。芽衣のところにいた天使も消えたらしい。でも大丈夫だろうこれからは二人でどんな困難なフラグでも乗り越えられると信じているから。

俺と天使と幼馴染（後書き）

幼馴染死亡フラグ編今回で終了です。ありがとうございました。新編２７日更新予定です。

俺と天使の犯人探し

ある日、部屋に入るとなぞの少女がいた。確認しよう、自分には妹はいない。そもそも身内に女の人は母しかいない。だからこの少女は……。

「君は、誰だ？」

「私ですか？」

「あ、ああ。君しかここにはいないと思うから君のことだよ」

「そうですね。それでは名乗らせてもらいます。私は天使です」

「……。か、変わった名前だね？」

「名前と言うよりは、種族でしょうか」

「ええっと、とりあえず天使と言う名前ではないと。じゃあ君の名前は？」

「名前ですか。そのようなものとうの昔に忘れてしまいました」

「自分の名前なのに忘れるのかよ」

「そうですね。どうしても私のことを名前で呼びたいのであれば、アスネと呼んでもよろしくてですわよ」

あるんじゃん名前。しかもよく分からない丁寧口調のようなもの。

「それじゃあ質問です。なぜアスネはここにいるんですか？」

「それは簡単な質問ですわ」

「いや、俺には全然わからないんだけど」

「私たち天使は、人間の運命を変える力を持っているのです。そして今回その力が悪用されたので来ました。この私がですよ」

「いや、全然分からないんだけど」

「一言で言えば、あなたはもうすでに死んでいるはずなのです」

「？意味が分からないんだけど？」

「そうですね。もっと分かりやすく、ある天使の言い方をまねるとフラグですかね」

「フラグってあの、死亡フラグとかの？」

「そうです。こんかいのあなたの場合はその死亡フラグが、なぜか回避されてしまっているのです」
「それってつまり、さっき言ったようにもう俺はすでに死んでいるはずだってことか？」
「ええ、間違いなく。昨日の今ぐらいの時間帯に事故で」
「ちょっと待ってくれ。俺の死亡フラグを折って何になるって言うんだ？そのまえに、君はもしかして俺を殺しに来たとか？」
「まさか、天使が人殺しなんて、道楽以外ではありえませんね」
「一番最悪な気がするんだが……」
「私がここに来た理由、それはフラグを折った人物の特定。そのためにここにいるのです。理解できましたか？」
「わ、分かった。とりあえず味方と考えていいんだな」
「そうです。ちなみにフラグを折った人物を特定した後でもあなたを殺したりしませんので、ご心配なく」
「そうか。じゃあ、少し安心できるな」
「それでは、早速ではありますが、どのフラグからにしましょうか？」
「？どのフラグからってどういう意味だ？死亡フラグしかないだろ」
「残念なことに、数種類ものフラグが折られています。つまり、犯人はその折られたフラグの数だけいる計算になるのです」
「一人一つしか折れないのか」
「基本的にはそうですが、人間ならば不可能ではありません」
「じゃあ、一人でやった可能性もあるのか？」
「無理です。なぜなら、一人で人の運命を変えてしまうような力を持てるような人間はありえないからです。人間程度の力では」
「それなら、かなりの数の天使がやったってことになるのか」
「だから私が来たのです。私は天使の中でもエリート中のエリートなのですから」
「自分からそんなこと言うやつにまともなやつはいないと思うんだけど」

「その考えも私によって改められるのですね。さすが、私」
もう、ただの自画自賛しかしてないな。
「とにかく、そのフラグを戻していけばいいのか？」
「残念ながら修復は不可能です」
「そうなのか？じゃあどうするんだ。まあ、死亡フラグは修復できなくてもいいんだけど」
「今回は犯人を見つける。ただそれだけです、幸いにもあなたに害の及ぶような折られ方は一つもないようですから」
「やっぱり不自然だな」
「まあ、ですからそのための私なのです」
「わかりましたよ。じゃあ、はりきって犯人探しと行きますか」
「そうですね。早速ではありますがどのフラグから行きますか？」
「ちなみに何個あるんだ？」
「１３個です」
「と言うことは、１３人か」
「おそらく」
「まあ、とりあえず簡単に片付きそうなものからにするか」
「簡単なものなんて一つもありませんけれどね。なぜならこれは天使がやったことなのですよ。しかも我々に気づかれぬように、これほどの数を」
「かなりの強者ってことか」
「全員がかなりの者であると思われますわ」
「それじゃあ、アスネはどれから犯人探しをしようとしていたんだ？もう、それから始めることにしよう」
「私はやはり、死亡フラグですわ」
「いきなりきつそうだけど」
「最も分かりやすいのです。人の生き死にに関わるようなことは」
「わかった。それじゃあさっそく犯人探しを始めるか」
「ええ、よろしくお願いいたしますね」
そして、俺のフラグを折った犯人を捜す日々がここから始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6045t/

俺と天使と…

2011年12月27日20時47分発行